

教育方法論（幼稚園）

概要

教育の目的、幼児教育の基本を踏まえ、教師の役割の理解を深め、保育（教育）知識・技術の活用の意義や方法を考え、技能として展開できるようにする。その上で、保育指導案を作成し、幼児に対し保育を実践し、実践後省察をする。さらに、情報機器を活用して効果的に教材等を作成する。

担当教員	堺 秋彦 他
授業形態	講義
学期	後期
必修・選択の別	選択
対象学生	こども保育2年生
時間数	90分×15回
単位数	2

目標

- (1) これからの社会を担う子ども達に求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する。
- 1) 教育方法の基礎的理論と実践を理解している。
 - 2) これからの社会を担う子ども達に求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方（子どもの興味関心に基づく自発的活動の中で、主体的・対話的で深い学びを実現）を理解している。
 - 3) 学級・幼児・教員・教室・教材など保育を構成する基礎的な要件を理解している。
 - 4) 育みたい資質・能力と幼児理解に基づいた評価の基礎的な考え方を理解している。
- (2) 教育の目的に適した指導技術を理解し、身に付ける。
- 1) 話法・板書など、保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている。
- 2) 基礎的な保育（学習指導）理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、保育展開、学習形態、評価基準等の視点を含めた保育指導案を作成することができる。
- (3) 情報機器を活用した効果的な保育や情報活用能力の育成を視野に入れた適切な教材の作成・活用に関する基礎的な能力を身に付ける。
- 1) 子ども達の興味・関心を高め、感性を培い、思考力の基礎を培うために、幼児の体験との関連を考慮しながら情報機器を活用して効果的に教材等を作成・掲示することができる。
 - 2) 子ども達の情報活用能力（情報モラルを含む）を育成するための指導法を理解している。

各回の内容

1. 教育の目的と幼児教育の基本 - 生きる力の育成（育みたい資質・能力）と幼児理解に基づいた評価 -
2. 教師の役割における認識と理解
3. 幼児教育における教材研究の意義と在り方
4. 幼児教育における保育方法の視点と展開の在り方 - 幼児の想像力や感性を養う環境設定・表現方法 -
5. 幼児の想像力や感性を養う表現方法の工夫 - 話法、書き方・描き方、造形表現 -
6. 幼児の想像力や感性を養う表現方法の工夫 - 身体表現 -
7. 幼児の想像力や感性を養う表現方法の工夫 - 音楽表現 -
8. 生きる力の基礎を培う保育の構想（計画立案）
9. 生きる力の基礎を培う保育の構想（教材研究）
10. 生きる力の基礎を培う保育の構想（保育実践） - 移動幼稚園 -
11. 生きる力の基礎を培う保育の構想（保育実践） - 移動幼稚園 -
12. 生きる力の基礎を培う保育の構想（保育実践） - 移動幼稚園 -
13. 生きる力の基礎を培う保育の評価と改善 - 幼児理解と保育の視点を基盤とした教師の表現力に対する評価 -（省察）
14. 情報機器を活用した保育（教育）方法
15. 情報機器を活用した保育（教育）方法と総括

準備学習（予習・復習等）

エクセル、ワード、エクセル、インターネット検索の操作に習熟しておく。

幼稚園・保育園で作成されるおたよりなどに関心を持ち見ておく。

幼稚園教育要領解説（幼稚園教育の基本、教職課程の編成）を熟読し幼児理解に基づいた評価の基礎的な考え方を理解する。

短期大学設置基準では、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準と定められております。本学では講義、演習については、原則として15時間の授業をもって1単位としています*ので、1単位の講義、演習については、30時間、2単位の講義、演習については60時間の予習・復習が必要となります(実験・実習は除く)。 *学則第24条

評価方法

教材研究の成果30%

指導計画の立案、保育の実践50%

保育実践の振り返りレポートと課題の明確化20%

教科書

参考文献

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（平成29年告示）
保育所保育指針（平成29年告示）

教育相談（幼稚園）

概要

教育相談およびカウンセリングの理論と基礎的手法について理解を深め、子どもとその保護者を対象とした支援スキルを実践的に学修することを目的とする。

担当教員	後藤 真
授業形態	講義
学期	前期
必修・選択の別	必修
対象学生	ことも保育コース2年
時間数	90分×15回
単位数	2

目標

教育相談の理論を正しく理解した上で、基本的な相談技法を用いることができる。また、子どもを取巻く状況を、個人・家庭・社会といった多角的な視点から把握し、事例を詳細に読み解くことができる。

各回の内容

1. 導入：教育相談とカウンセリングマインド
2. 子どもを取り巻く環境と現状
3. 教育相談概論
4. 教育相談の技法
5. 支援者としての自己分析
6. 演習：関係性の構築
7. 構成的グループエンカウンター：「セルフケア」について
8. ライフサイクルにおける幼児期：「問題」に対する包括的理解と対応
9. 教育相談のプロセス
10. 演習：事例検討 「発達障害」
11. 演習：事例検討 「虐待」
12. 演習：事例検討 「家族と地域」
13. 連携と社会資源の有効活用
14. 構成的グループエンカウンター：「スーパービジョン」について
15. まとめ：教育相談の理論と技法

準備学習（予習・復習等）

授業で配布される自主学習ワークシートに取り組む。また、関連するニュースに関心を持つ。

短期大学設置基準では、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準と定められております。本学では講義、演習については、原則として15時間の授業をもって1単位としています*ので、1単位の講義、演習については、30時間、2単位の講義、演習については60時間の予習・復習が必要となります(実験・実習は除く)。 *学則第24条

評価方法

毎回の授業後に提出する小レポート40%、中間レポート30%、期末レポート30%

教科書

無し

参考文献

授業中に適宜資料を配布する

幼稚園教育実習事前事後指導

概要

教育実習の意義を理解し、心構えを養うと共に、自己課題を明確にしたうえで教育実習を行う。教育実習後は、新たな課題を基に今後の取り組みを整理できるようにする。さらに、教育実習に必要な保育の知識、技術を学び、実践できる力を身に付ける。

担当教員	長谷川美香・堺秋彦
授業形態	演習
学期	通年
必修・選択の別	必修
対象学生	こども保育コース1、2年
時間数	90分×15回
単位数	1

目標

2年間で2回行う教育実習を念頭に、教員の役割や職業倫理、保育の観察、記録、計画についてなど、実習の事前指導と事後指導を行う。

各回の内容

1. 教育実習の意義、目的
2. 実習生としての態度、心構え
3. 保育現場の現状と保育者の役割
4. 観察、参加実習の意義、目的
5. 幼児理解の視点と適切な支援
6. 日誌を記録する意味とその重要性
7. 日誌の書き方
8. 教材の吟味と環境構成の在り方
9. 部分、責任実習の意義、目的
10. 指導計画の重要性とその作成
11. 指導案の作成
12. 実習への課題の確認
13. 実習体験の共有化と発表
14. 評価に基づく個別指導
15. 自己課題への今後の取り組みの整理

準備学習（予習・復習等）

日誌や指導案作成、教材研究など、教育実習で必要と思われる準備を、授業時間外においても各自進めること。「幼稚園教育実習の手引き」をよく読み、普段の生活でも、場、相手に合った挨拶や話し方、服装などを意識し、実践するようにすること。子ども理解を深めるため、学内の「親と子の広場」に積極的に参加することを望む。

短期大学設置基準では、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準と定められております。本学では講義、演習については、原則として15時間の授業をもって1単位としています*ので、1単位の講義、演習については、30時間、2単位の講義、演習については60時間の予習・復習が必要となります(実験・実習は除く)。 *学則第24条

評価方法

各回の振り返り30%、課題及びレポート50%、提出物20%

教科書

「幼稚園教育実習の手引き」（本学作成のもの）、「幼稚園教育要領解説」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」、「幼稚園・保育所・認定こども園実習パーフェクトガイド」（小櫃智子ら編著、わかば社）、「実習日誌・実習指導案パーフェクトガイド」（小櫃智子ら編著、わかば社）

参考文献

適宜、授業の中で紹介する。

幼稚園教育実習

概要

幼稚園教育実習 は、1年次で行う幼稚園教育実習（観察・参加実習）の次の段階として位置づけられ、参加実習の他に、責任（部分・全日）実習が加わる。そして、子どもへの理解をさらに深めるとともに、幼稚園教諭の役割、幼児教育の目標、幼児の生活、保育内容への理解、家庭教育支援に繋がる保育者の援助などの学びを深めていく。

担当教員	長谷川・坂本・狩野・絹川・堺・奥田
授業形態	実習下・齋藤
学期	2年前期
必修・選択の別	必修
対象学生	こども保育コース2年
時間数	15日間
単位数	3

目標

- 1・幼稚園教育実習での学びや既習の授業の学びを活かしながら、実習に参加する。
- 2・幼稚園教育実習の方法を踏まえ、クラスの子どもの実態に即した援助の在り方を学び、指導計画について実践的に理解する。
- 3・幼稚園教諭として必要な資質、能力、技術を習得する。
- 4・実践した保育について、反省と評価を受け、幼稚園教諭の役割理解と自己課題を明確化する。

各回の内容

1. 子どもの名前を覚え、関わりの中でありのままの子どもの姿を知り、子ども理解に励む。
2. 幼稚園の1日の流れを、総合的に理解する。
3. 一人ひとりの子どもの発達に即した援助の在り方、方法を学ぶ。
4. 幼稚園教諭としての態度、技術を習得し、必要な資質や技能を養う。
5. 担当教諭の補佐として、環境構成、教材の準備や後片付け、クラス運営の方法、行事の準備、清掃、その他の業務を行う。
6. 個人と集団の中で子どもを理解する。
7. 子どもの実態に合った教材を準備し、ねらい・場面の構成・留意点を考え、生活の一部、または一日の指導案を作成し、実践する。
8. 個々の発達の姿を理解し、一人ひとりを大切に保育の実際を学ぶ。
9. 幼稚園、家庭、地域社会の連携のあり方を学び、子ども理解を深める。
10. 自己を客観的に見つけ、自己評価を行う。
11. 15日間、上記のような内容で、保育活動に主体的にかかわりながら実習を行う。なお、詳細は実習先によって異なる。

準備学習（予習・復習等）

これまでの実習での課題をもとに、それぞれ準備を進めておく。指導案作成や教材等の準備も進めておくこと。幼稚園教育実習の学びを活かせるように、反省や考察を深め、幼稚園教育実習の自己課題を明らかにしておく。授業内容についても、振り返り、確認すること。実習前のオリエンテーションで、指導担当教諭から指示があった場合は、その準備も進めておくこと。

短期大学設置基準では、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準と定められております。本学では講義、演習については、原則として15時間の授業をもって1単位としています*ので、1単位の講義、演習については、30時間、2単位の講義、演習については60時間の予習・復習が必要となります(実験・実習は除く)。 *学則第24条

評価方法

実習先の評価70%、実習日誌の内容や実習中の様子等30%

教科書

- 1・「幼稚園教育実習の手引き」、本学作成のもの
- 2・「幼稚園教育要領解説」、文部科学省、フレーベル館

参考文献

特になし